

「ことではないのだろうか」。やがて、「ラオスに学校を贈ろう」という活動が始まりました。子どもたちは、募金活動を始めました。村も、子どもたちと一緒に、「ふるさと納税」を通じた協力を、村外に呼びかけました。

「お互いさま」の気持ちで村内外から集まった寄付金は、AEFAを通して現地の教育機関に送り、学校建設に役立ててもらうことにしました。また、この貴重なつながりを、飯館村の教育にも活かそうと、交流事業も始まりました。

ドンニヤイ中学校の新校舎が完成したのは、それから3年後、平成24年のことでした。

東日本大震災と原発事故により、思いもよらない全村避難を余儀なくされた飯館村とドンニヤイ村とが、今までのようにつながってきたのかを、テオンさんの来村を機会に、改めてお知らせしたいと思います。



「遠く離れたこの場所に、こんなにたくさんの友達がいる。皆さんにお会いできて私は本当に幸せです。いつかこの中の誰かが私たちの村を訪れてくれたら素晴らしい」。テオンさんは、温かなまなざしで一言ずつかみしめるように語りました

プレゼントされた飯館中オリジナルTシャツを着たテオンさん(前列中央)

司会やあいさつを英語でこなした飯館中学校の生徒たち。テオンさんと一緒にクイズも楽しみました。心と心が触れ合う素敵な時間になりました

村役場では、ドンニヤイ村の皆さんの感謝を菅野村長に伝えたテオンさん。家族や村人が力を合わせる暮らしや学校のようなすもいきいきと伝えました



飯館中学校でラオスの民踊を披露するテオンさん(右手前)と、動きを真似て一緒に踊る生徒たち。笑顔がかわされました

特集2 「お互いさま」をありがとう ラオスのまでいな村から届きました

10月4日、東南アジアのラオスから、テオン・ゲオマニイさんが飯館村を訪れました。テオンさんは、村が建設を支援したサラワン県ドンニヤイ村のドンニヤイ中学校を卒業して、この秋高校生になったばかり。高校進学が夢がかない、村へ感謝を伝えるため、支援を橋渡ししたNPO法人の協力を得て来日しました。テオンさんは、ドンニヤイ村の皆さんが、被災した飯館村に心を寄せ、飯館村民の健康や幸福を、今も祈り続けていると伝えてくれました。

「ラオスに学校を作るお手伝いをしよう」。飯館村でその活動が始まったのは、平成21年のことでした。認定NPO法人アジア教育友好協会(AEFA)の理事を務める佐川旭さんが、飯館村の3つの小学校で行った出前講座がきっかけです。児童らは、講座を通じて、ラオスの人たちの心の豊かさと共に、教育環境が十分とは言えない子どもたちの現状について学びました。そして、自分たちとかけ離れた学習環境にあっても、目を輝かせて学んでいるラオスの子どもたちのようすが心に残りました。「私たちが学んでいる環境が、当たり前ではないんだ」「何かお手伝いできる

ラオス人民民主共和国

ラオスは東南アジアのインドシナ半島に位置する内陸国。国土の70%は高原や山岳地帯で、雨期と乾期があります。面積は日本の国土の約63%。首都はビエンチャンで、公用語はラオス語です。